

# 教 育 研 究 業 績 書

2020年 5月 1日

氏名 荒 井 眞 一

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
1. 人文社会系人文学教育学	教育学、教育方法	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 教育研究会への学生参加	平成 22 年 11 月 平成 23 年 11 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 合同教育研究会の全道大会に教職課程講義受講学生のほぼ全員を参加させ、現職教員との交流を図らせた。また、その交流の成果を報告資料としてまとめさせ、講義の後半部において学生全員で議論させ認識の共有を図った。さらにこれら講義の成果を論文化し、合同教育研究会において報告し学会発表も行った。</li> </ul>
2) 無線音声出力の実現	平成 22 年 10 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 音声出力設備の存在しない（または不安定な）教室での音声出力を確保するため、近年流通しているBluetoothスピーカー「オムニビート」を講義で使用した。このスピーカーとノートパソコンの併用により、音声出力の確保の他、教室後部席での確実な視聴や、小型（350cc 缶より小さい）で配線不要のスピーカーの使用による事前準備の簡素化が達成された。</li> </ul>
3) 模擬授業動画の活用	平成 22 年 4 月 ～7 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育実習講義における学生による模擬授業の様態をデジタルビデオカメラで撮影し、授業担当学生にDVDを配布するとともに、翌週の講義で撮影した動画を講義の場で映写し全学生と授業内容の改善点について話し合いを行った。この結果、板書の方法や、声の出し方、机間巡視、授業の時間配分といった点における改善点を受講学生全員で共有することが可能となった。</li> </ul>
4) ファイル共有アプリケーションの活用	平成 23 年 10 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ファイル共有アプリケーションである dropbox を利用し、総合演習受講学生各自に作成させた教材開発案を受講学生全員に共有させた。この教材開発案をもとに、総合演習講義内での検討後に各学生が作成した指導案も全員に共有させた。さらに、これら指導案の改善点について学生たちに議論させた後、各学生による指導案や議論の要点といった成果の共有も図った。</li> </ul>
5) 学生によるプレゼンテーションの指導	平成 23 年 11 月 (毎年実施)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 合同教育研究会の全道大会に総合演習受講学生全員を参加させ、事前に作成させた教育内容研究や指導案を家庭科教育分科会の場で報告させ、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の育成を図った。また、報告の場で現職教員からいただいた意見を踏まえて指導案の作成や改善を行わせ、受講学生の授業技術の育成も図った。</li> </ul>
2 作成した教科書，教材 1) iPod を利用したプレゼンテーション	平成 22 年 5 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アナログテレビの設置された小教室における講義で、このテレビにiPodを接続し、パワーポイントファイルから変換した写真画像をスライドとして提示した。アナログテレビには暗所を必要としないという利点があり、iPodによるスライド提示では黒板の同時使用も可能となる。この利点を活用し、基本的な板書としてiPodによるスライドを示しつつ、講義内で使用した文献資料に対する受講学生各々の見解を黒板にまとめるといった授業方法が可能となった。</li> </ul>

事 項	年月日	概 要
2) 教員採用試験対策プリントの作成	平成 22 年 10 月	・教員採用試験へ向けての一時的な対策として、過去問題や市販の問題集をもとに採用試験対策プリントを、一般教養・教職教養の双方について各 30 枚を 1 セットとして作成した。
3) iPad を利用したプレゼンテーション	平成 23 年 5 月	・400 名収容教室（大講堂）での教育制度論講義に iPad を導入し、キーノートによるスライド提示との黒板機能を利用した手書き文字提示の双方を実現した。iPad の使用により、安定した操作性のもとでスライド提示と板書の双方を、適時使い分けしつつ行うことが可能となった。
4) レーザープリンタの導入によるカラー資料の作成	平成 23 年 9 月	・カラーレーザープリンタの導入に伴い、一部の講義資料をカラーで作成し学生に配布した。芸術作品の鑑賞や地図、化学実験の内容を示す講義資料では、カラーの図を用いることにより学生の理解が促進されることをアンケートと複数学生の意見から確認した。細胞学や内科学を担当する同僚教員の講義資料もカラーで作成し学生からの意見を募ったところ、細胞や臓器といった微細な図にカラーを用いることで学生の理解が深まることが確認された。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他	平成 22 年 4 月	・全ての担当講義の履修者名簿をエクセルファイルで作成し、出欠管理、課題管理、学生の得点合計を一元化した。このファイルの作成により、履修学生の得点状況確認や成績照会に対して即座に明確な回答を示すことが可能となった。自身の管理するオムニバス講義（総合教養講座）においても同様のファイルを採用し、講義担当各教員の得点記入作業の簡素化を達成した。
	平成 22 年 9 月	・北海道文教大学外国語学部で取得可能な教員免許のすべてに対して、卒業要件を満たしながら教職科目の単位履修を円滑に行うための方法について解説したワード版の小冊子を作製した。これら小冊子の内容をまとめたパワーポイントファイルも同時に作成し、後期開始前のオリエンテーションで全ての教職履修学生に単位取得の方法を理解させた。
	平成 23 年 5 月	・各学生が履修状況を把握し、教員免許状取得に際して必要な単位数や現時点で取得している単位数の合計が一目でわかる「単位取得確認票」をエクセルファイルで作成した。これらファイルを北海道文教大学外国語学部の教職履修学生全てに配布し、取得単位を記入させた後ファイルを回収させた。このファイル作成により全ての教職履修学生の履修状況把握が可能となった。
	平成 25 年 4 月	・札幌大谷大学で取得可能な教員免許のすべてに対して、卒業要件を満たしながら教職科目の単位履修を円滑に行うための方法について解説した冊子（『平成 25 年度版 教職課程履修の手引き』）を作製した。これら小冊子の内容を基礎にオリエンテーションを実施し、全ての教職履修学生に単位取得の方法を理解させた。
	平成 26 年 4 月 （平成 27 年 4 月および 28 年 4 月に改定版作成）	・札幌大谷大学で取得可能な教員免許のすべてに対して、卒業要件を満たしながら教職科目の単位履修を円滑に行うための方法について解説した冊子（『平成 26 年度版 教職課程履修の手引き』）を作製した。これら小冊子の内容を基礎にオリエンテーションを実施し、全ての教職履修学生に単位取得の方法を理解させた。
	2020 年 3 月 31 日	・札幌大谷大学教職部会員とともに、教職課程にかかわる教員による研究業績の強化を目指して『札幌大谷大学一般教育研究論集 第 2 号』を刊行した。

職務上の実績に関する事項				
事項	年月日	概要		
1 資格, 免許				
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項	平成24年4月	全国私立大学教職課程研究連絡協議会北海道地区理事		
4 その他		合同教育全道集会共同研究者、歴史教育者協議会分科会世話人		
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 『栄養教諭採用試験突破対策 2011』	単著	平成 23 年 3 月	北海道文教大学健康栄養学科 pp. 1-102	栄養教諭養成に関係する基本的事項を整理し、栄養教諭採用試験受験学生用に専門職に向けた内容を体系化した冊子を作製した。基本的な事項をまとめた基本編と重要事項の課題と定着を図るための問題編の2部構成からなる教材としてこの冊子を活用させた結果、採用試験一次試験突破者の数が3倍(14名中2名から8名中6名)になった。
2. 『地域を学びの場とした教職実践のあゆみ 第1号』	単著	平成 24 年 10 月	札幌大谷大学社会学部 地域社会学科 pp. 1-63	札幌大谷大学において行われたオープンキャンパスの場において、学生たちに高校生相手の模擬授業を行わせた。そこから得られた成果と課題を考察させることによって、現行の教育制度のもとで教育実践を行う意味について考察を試みさせた。荒井が編集担当。
3. 『学力と教育課程の創造 社会認識を育てる教育実践とそのあゆみ』	共著	平成 25 年 8 月	株式会社同時代社 pp. 1-175	社会科教育の分野において積み重ねられた教育実践や教育理論の蓄積とその成果について、様々な分野を選考する9名の著者による論考を集約した。これら集約の成果を踏まえて、新しい時代において求められる学力のとらえ方や、教育課程の在り方についての提言を試みた。荒井が共同編集担当。(執筆は pp. 42-54)
(学術論文) 1. 「地域から社会の根本を見つめる目を養うことを目指した授業づくり」	単著	平成 22 年 7 月	『北海道の教育 2010 年版』 合同教育研究全道集会 実行委員会 pp. 223~228	教科間の内容の接続を達成させつつ、社会の根本を見つめることが可能となるような実践の方向性について、いくつかの教育実践の成果やそれら実践に対する合同教育研究集会参加者による議論の内容を踏まえつつ考察した。
2. 「教育研究集会参加による実践的学びの実現を目指した教員養成系大学における授業実践」	共著	平成 23 年 3 月	『愛知教育大学研究報告』第60輯 pp. 82~89	合同教育研究集会の全道大会に教職課程講義受講学生を参加させ、現職教員との交流の成果を報告資料としてまとめさせ、講義の後半部において学生全員で議論させ認識の共有を図った。これら一連の実践による成果について検討を試みた。共著者：青木 香保里。第2,3章を荒井が執筆

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 3. 「教育諸制度の基盤としての教育基本法の位置づけとその把握」	単著	平成 23 年 3 月	『北海道文教大学紀要』第 30 号 pp. 19～24	教職課程講義「教育行政論」「教育制度論」において理論的中核をなす教育基本法の内容とその位置づけについて、いくつかの文献記述に基づいて検討した。その検討の成果を基に作成した講義内容に対する学生による認識形成のありようについて、学生によるレポート記述を基に考察を試みた。
4. 「プレゼンテーションを目的としたアナログ機器の有効活用」	単著	平成 23 年 6 月	札幌大谷大学短期大学部美術科 一般教育研究論集第 1 号 pp. 95～101	世間に普及している iPod を利用することによって、パワーポイントなどのプレゼンテーションをこれらアナログテレビに映し出す方法について具体的に述べた。従来、アナログテレビにパソコンをつなぐための機器としてダウンスキャンコンバータが存在するが、配線が複雑な上に画質の低下が避けられない。これに対して iPod は、アナログテレビとの接続・配線が簡単な上に画質の低下も小さく、リモコン操作も可能であり、デジタルテレビやプロジェクターとの接続も簡単である。一方、一般家庭での使用を前提としていたアナログテレビは、操作がきわめて簡単な上に暗所を必要としないという優位性を持つ。当該論文では、筆者の担当する「教育行政論」講義における実際の使用例を示しつつ、iPod とアナログテレビとの接続の有効性について述べた。
5. 「地域から社会を見つめる目を養うことを目指した授業づくり」	単著	平成 23 年 7 月	『北海道の教育 2011 年版』 合同教育研究全道集会 実行委員会 pp. 238～242	地域という方向性から社会を見つめることが可能となるような総合学習実践の具体的なありようについて考察した。この考察に際しては、北海道各地から合同教育研究集会に参加した教員らによる実践報告や指導案をもとに重ねた議論の経過を踏まえつつ、それら実践の内容及び方法上の意義について検討するという方法を取り入れた。これら検討の結果、継続的な参加者（教員）による報告の成果が、それら報告から自身の授業づくりを行った若い世代の参加者（教員）へと引き継がれ、それぞれの地域における特色を反映した授業づくりが達成されたことを確認した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 6. 「歴史教育における『生産関係』の位置づけ —教科編成の基礎的原理としての社会的道徳性—」	単著	平成 24 年 3 月	『北海道文教大学論集』第 13 号 pp. 1-14	1970 年代を中心に歴史教育において唱えられた「生産力と生産関係」の内容や意義について検討した。1972 年における安井俊夫実践「松戸農民の歴史」に代表されるように、歴史教育における「生産関係」は、「生産力」の発展に伴う「階級闘争」として語られることが一般的であった。内田義彦によれば、「生産関係」が「階級闘争」という形で表れるのは一定の過程を経た上でのことであり、その以前に形成された社会的な道徳性が無くては成し遂げられないことである。当該論文では内田の記述に依拠した「生産関係」の在り方について考察し、教科編成の基礎的原理となる社会的な道徳性が形成される過程に関する教育内容を提言した。
7. 「“甘み”に関する教育内容の再構成と指導」	共著	平成 24 年 3 月	『愛知教育大学研究報告』第 61 輯 pp. 75～84	“甘み”の代表である「砂糖」に加え多様化する“甘み”の特徴と課題をとらえ、教育内容の再構成を試みた。“甘み”の代表である「砂糖」についての理解を深め、次に甘味料の種類や食品添加物としての甘味料などに焦点を当て整理した。その上で、「カロリーオフ」などの語を冠した商品について調査し、これら商品の特徴を明らかにした。 共著者：青木香保里・浅井祐子・荒井眞一・吾妻知美・高野良子。第 2 章第 1 節を荒井が執筆
8. 「教育研究集会参加による学生の実践的学びと認識形成—教育実践の交流と連携を軸とした教職における専門性の探究」	共著	平成 24 年 3 月	『愛知教育大学家政教育講座研究紀要』第 41 号 pp. 39～49	合同教育研究集会の全道大会に教職課程講義受講学生を参加させ、現職教員との交流の成果を報告資料としてまとめさせ、講義の後半部において学生全員で議論させ認識の共有を図った。これら一連の実践による成果について検討を試み、前年度大会における成果と合わせて比較検討した。共著者：青木 香保里。第 2, 3 章を荒井が執筆
9. 「地域とのかかわりの中から一般性を抽出することを目指した授業づくり」	単著	平成 24 年 7 月	『北海道の教育 2012 年版』 合同教育研究全道集会 実行委員会 pp. 196～201	教科間の内容の接続を達成させつつ、社会の根本を見つめることが可能となるような実践の方向性について、地域とのかかわりの中から得られる一般性として抽出することを目指した。いくつかの教育実践の成果やそれら実践に対する合同教育研究集会参加者による議論の内容を踏まえつつ具体的に考察した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 10. 「“排泄”に関する教育内容の再構成と指導」	共著	平成 25 年 3 月	『愛知教育大学研究報告』第 62 輯 pp. 93~101	家庭科における排泄に関する教育内容を現代の子供たちの生活と排泄を巡る状況をもとに検討し、人間の体と生活に根差すことをよりどころに排泄をめぐる現代的課題を視野に入れた教育内容構成と指導をめざし、教育内容の把握と整理を行った。 共著者：青木香保里・鷺住美里・荒井眞一・吾妻知美・高野良子。第 2 章を荒井が執筆
11. 「教育研究集会参加による実践的学びの教職課程講義への接続」	単著	平成 25 年 3 月	『札幌大谷大学紀要』第 43 号 pp. 75~81	栄養教諭を目指す教職課程講義受講学生に「総合演習」講義内で教育内容研究を行わせ、その後合同教育研究集会の全道大会に参加させ、研究成果を現職教員らに対して報告させた。学生たちは、参加教員からもらったアドバイスを生かしつつ、総合演習の時間内に内容研究を踏まえた指導案を作成した。本論では、これら一連の実践の概要と経過について、実例を示しつつ述べた。
12. 「学生による実践的学びの実現を目指した教員養成の方法に関する研究」	単著	平成 25 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 1 号 pp. 47~75	北海道では、年に一度全道各地の教員が札幌に集まり、合同教育研究集会が開催される。この集会において共同研究者を務める筆者は、2009 年に教員養成大学で自身の担当する教職科目受講者 58 名をこの集会に参加させた後、講義内において学生各々の目にした実践について報告させ受講学生全員とそれら実践の内容について議論した。本稿では、実践的な学びを経た学生の認識形成のありようについて、一般性を導き出すことを目的として、教育研究集会への学生の参加報告資料を主たる材料として検討を行った。
13. 「食物アレルギーに関する教育内容の再構成と指導」	共著	平成 26 年 3 月	『愛知教育大学研究報告』第 63 輯 pp. 51~59	家庭科における食物アレルギーに関する教育内容を現代の子どもたちを巡る状況をもとに検討し、現代的課題を視野に入れた教育内容構成と指導をめざし、教育内容の把握と整理を行った。共著者：青木香保里・荒井眞一・吾妻知美・高野良子。第 2 章を荒井が執筆
14. 「アクティブラーニングの方法をとり入れた社会科授業の内容構成とその方法」	単著	平成 26 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 2 号 pp. 67~83	アクティブラーニング特集の 1 つとして、学科の特性を踏まえたアクティブラーニングの社会科教育における内容について考察し、その成果を実践の経過を検討することにより検証した。この検討を踏まえ、学科の理念を有効に生かす社会科教育の内容構成について、考察した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 15. 『『経済学批判』の枠組みを基盤とした授業実践』	共著	平成 27 年 3 月	『札幌大谷大学紀要』第 45 号 pp. 77～82	大谷大学社会学部地域社会学科における「教職自主ゼミナール」の取り組みの概要について述べた。採用した実践は、学問研究の成果を理論的な枠組みとして用いることを目指した。今回の実践では、学生らの設定した十勝地域における製糖業の一貫性をとらえるために、『経済学批判』をその枠組み設定の対象とした。この採用により、生産における一般性を踏まえた流通や消費のありようをとらえることが可能となった。 共著者：荒井眞一・岡部敦・酒井義信。第 2 章を荒井が執筆
16. 「アクティブラーニングの方法をとり入れた社会科授業の内容構成とその方法(2)」	単著	平成 27 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 3 号 pp. 119～131	平成 25 年度からの継続課題として、学科の特性を踏まえたアクティブラーニングの社会科教育における内容について考察し、その成果を実践の経過を検討することにより検証した。本稿では、アクティブラーニングをとらえる理論的な枠組みとして「共感的なわかり方」が示された。
17. 「古典経済学における理論的枠組みに基づいた地域研究の教材化」	共著	平成 28 年 3 月	『札幌大谷大学紀要』第 46 号 pp. 71～76	「教職自主ゼミナール」の取り組みを通して、授業実践において学問研究の成果を理論的な枠組みとして用いることの有効性について述べた。今回の実践においては北海道十勝地域における牛乳生産にかかわる経済活動をとらえる実践のありようについて、学生とともに考察し、大学見学会に参加した高校生たちを対象に実践を行った。『経済学批判』を枠組みとして採用した結果、生産における一般性を踏まえた流通や消費のありようをとらえることにより、楽しい授業実践を達成することが可能となった。共著者：荒井眞一・勝谷友一・酒井義信。第 2 章を荒井が執筆
18. 「キャリア教育における『基礎学力』の理論的枠組み」	共著	平成 28 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 4 号 pp. 1～15	大学における基礎的な学力の持つ意味について、先学の説に依拠しながら考察し、現代に通ずる理論的な枠組みを導き出すことを試みた。1958 年以降広岡亮蔵によって述べられた「基礎学力」に関する論を検討することにより、“社会において求められる能力”というもののありようについて考察した。共著者：荒井眞一・平岡祥孝。第 2 および 3 章を荒井が執筆

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 19. 「アクティブ・ラーニングにおける能力論とその源流」	共著	平成 29 年 3 月	『札幌大谷大学紀要』第 47 号 pp. 95～100	アクティブ・ラーニングにおける理論的な基礎をなす事柄について考察した。いくつかの記述の検討の結果、アクティブ・ラーニングという語の意味するところは幅の広いものであり、検討するに当たって留意すべきは、この語の意味するところよりこの語の背景にある能力にかんする論考であった。また、この語が世に出る以前の 1970 年代後半より、同様な実践は民間教育団体などで行われており、実践を通してどのような能力（「学力」）が培われるべきかという議論がなされていた。共著者：荒井眞一・勝谷友一・酒井義信。第 2 章を荒井が執筆
20. 「アクティブ・ラーニングの基盤となる能力論と 1970 年代における『学力』論の比較検討」	共著	平成 29 年 3 月	『北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会会報』第 36 号 pp. 9～19	アクティブ・ラーニングにおける理論的な基礎をなす能力論のいくつかについて比較検討した。検討の結果明らかになった第 1 の点は、アクティブ・ラーニングにおいて求められる能力（社会人基礎力）は経済界などから求められている能力のあり方と軌を一にするものであるという点であった。明らかとなった第 2 の点は、歴史教育者協議会では実践を通してどのような能力（「学力」）が培われるべきかという議論がなされていたという点であった。共著者：荒井眞一・青木香保里。第 1・2 章を荒井が執筆
21. 「教科における学力と主体形成 - 社会科教育にかかわる記述から-」	単著	平成 30 年 3 月	『札幌大谷大学紀要』第 48 号 pp. 57～63	社会科教育にかかわる研究成果の検討から、教科における学力の考え方に対して、学問研究成果を基盤とした社会的な主体形成という 1 つの枠組みの提示を行った。1970 年代後半に盛んに議論された「学力」論争においては、ある時期を境として議論の方向性の変更が見られた。歴史教育者協議会における「活動方針」は、1970 年代初頭においては『経済学批判』等に理論的な根拠を有するものと考えられたが、上記「態度」の位置づけが変化したのと同じ時期に中核となる「人民のたたかい」が削除された。改めて水戸学における記述を検討した結果、「尊王攘夷」という考えの始まりが、水戸学の精髓をまとめた「弘道館記」碑文に見いだされるとともに、幕末志士と水戸学者とのかわりが見明らかとなった。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 22. 「新教育課程に向けた総合学習の教材及び教育内容に関する検討 - 『キャリア教育』の課題をふまえて -」	共著	平成 30 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 6 号 pp. 21~45	新しい教育課程における総合学習をにらみ、その教材・教育内容について、「キャリア教育」のあり方と結びつけ、具体的・反省的に分析を行った。その結果、従来の「キャリア教育」の問題点を踏まえて探究できるような自主教材（ワークシート）の作成方法、及びインタビューによる職業、労働に関する具体的な取材方法、そしてそれらをまとめ発表に至るまでの生徒の活動と教師の支援をありようを明らかにした。共著者：荒井眞一・加藤裕明。第 1 章を荒井が執筆
23. 「経済学分野における知見を基礎とした『地域教材』の活用」	共著	平成 30 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 6 号 pp. 101~112	大谷大学社会学部地域社会学科における「教職自主ゼミナール」の取り組みの概要について述べた。採用した実践は、学問研究の成果を理論的な枠組みとして用いることを目指した。今回の実践では、学生らの設定した十勝地域における馬鈴薯生産における一貫性をとらえるために、『経済学批判』をその枠組み設定の対象とした。この採用により、馬鈴薯生産における一般性を踏まえた流通や消費のありようをとらえることが可能となった。共著者：荒井眞一・平岡祥孝・加藤裕明。第 2 および 3 章を荒井が執筆
24. 「科学的な社会認識の内容に関する基礎的考察」	単著	2019 年 3 月	『札幌大谷大学紀要』第 49 号 pp. 65~72	科学的な社会認識の内容について教育学的に明らかにするための基礎的作業として、高村泰雄と内田義彦による文献について検討・考察した。科学的な社会認識を考察するに際しては、一定な状況下に置かれた人間がとりうる行動の基礎を十分に認識した上で学問的な方法をもってそれら状況下における人間の行動の帰結するところを理解することが不可欠となることが明らかとなった。社会現象においては、自然現象とは異なり、意志的行動の基礎には常に行動の内的端緒が存在する。それゆえ社会科学では行動の基礎となる情念に対する自覚の深まりが求められる。
25. 「社会的な意識形成を狙いとする社会科『学力』論の基礎的考察」	共著	2019 年 3 月	『札幌大谷大学社会学部論集』第 7 号 pp. 163~172	1950 年代から議論の中核になってきている「学力」論について言及をしながら、現代の「社会科」と本来の社会科についてどのように違うのか、また現代の社会科がこのようにあってほしいということを問い直すことをめざした。勝田守一の「学力」論を中心に著者の解釈を取り入れ、社会科教育に関わる本多公栄の論に対して 2 章で検討してきた内容を踏まえ検討を行った。共著者：荒井眞一・船津悠斗。第 1 章を荒井が執筆

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 26. 「学問研究成果を踏まえた教育内容に内在する主体形成への契機 - 社会科教育にかかわる記述から-」	単著	2020年3月	『北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会会報』第39号 pp. 1～9	社会科教育にかかわる研究成果の検討から、学問研究成果を基盤とした社会的な主体形成という1つの枠組みについて考察を行った。歴史教育者協議会における「活動方針」は、1070年代初頭においては『経済学批判』等に理論的な根拠を有するものと考えられたが、同じ時期に中核となる「人民のたたかい」が削除された。改めて文化遺産となっている幕末期の学問研究成果のうち水戸学における記述を検討した結果、「尊王攘夷」の始まりが水戸学の精髓をまとめた「弘道館記」碑文に見いだされ、研究成果と歴史的な事象とのかわりが示唆された。
(その他) 1. 「歴史教育者協議会62回全国大会・第23『社会科の学力と教育課程』分科会報告」  2. 「教育研究集会参加による実践的学びを経た教職課程履修学生による認識形成」  3. “Home Economics Education in Japan”	単著  単著  共著	平成22年11月  平成23年9月  平成23年9月	『歴史地理教育』2010年11月増刊号  『第21回日本教師教育学会全国大会 要旨集録』 pp. 59, 60  <i>Japan-New Zealand Research Cooperative Program 2011</i> p. 37	歴史教育者協議会「社会科の学力と教育課程」分科会におけるいくつかの実践報告および理論的提起の概略とともに、数年来交わされている議論の総括を図った。分科会では、十数年にわたる議論の成果を著作としてまとめることが確認された。  教職科目履修学生を教育研究集会に参加させた際の実践報告・議論の経過と学生によるレポート記述をふまえて、研究集会参加の意義について述べた。加えて、総合演習受講学生に対しては、研究集会の場で小グループによる報告を行わせ、それら成果をまとめさせた後、各学生に指導案を作成させた。  二国間共同セミナーにおけるゲストスピーチを総括的に分析した。ニュージーランドから訪問した研究者たちに対し、家庭科教育を中心とした日本における授業実践の概略について整理した上で、授業において実習の持つ意味について考察した。これら叙述を踏まえて、日本の授業実践における特徴ともいえる指導案をその実践例と共に紹介し、この事例に基づいて愛知教育大学附属名古屋小学校で行われた「手縫いをしてみよう」の研究授業を事例報告した。共著者：青木香保里。2, 3章を荒井が執筆

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 4. 「携帯情報端末を用いたアナログ情報の手軽なポートフォリオ化のための検討」	単著	平成 23 年 11 月	『PC カンファレンス北海道 2011 論文集』 pp. 32, 3	2013 年度より実施される教職実践演習において作成が必須とされている教職履修カルテの効果的な運用方法について考察した。手書きメモなどをデジタル化する手段としては、スキャナの利用が一般的であるが、本稿では、携帯情報端末と共に、camiapp といった画像取り込みソフトやevernote といったファイル集約ソフトを利用して、手書きメモなどのデジタル化利用の方法について事例報告した。この方法を利用することで、学生自身による自己評価や教員からのアドバイスを多面的に行うことが可能となることが示唆された。
5. 「歴史教育者協議会 62 回全国大会・第 23 『社会科の学力と教育課程』分科会報告」	単著	平成 23 年 11 月	『歴史地理教育』2011 年 11 月増刊号	歴史教育者協議会 62 回全国大会「社会科の学力と教育課程」分科会における成果と課題について、ここ数年に報告された実践の成果を踏まえつつ総括した。分科会における一連の議論から確かな成果を持つものとして抽出された事柄は、白尾裕志らによって行われ続けている教科通信の認識形成における有効性であった。この成果の検討を踏まえ、1980 年以降に複数の研究者・実践者によって提起された理論的な枠組みの、実践による検証の必要性を次なる課題として提起した。
6. 「『教職自主ゼミナール』を足場とした高大接続の取り組み」	単著	平成 26 年 5 月	『私立大学の特色ある教職課程事例集』全国私立大学教職課程研究連絡協議会 pp. 53-6	社会科教諭免許状取得を目標とする札幌大谷大学地域社会学科 1 年生とともに高大接続の一環として行った、系列高校への出前授業の授業づくりと授業づくりの経過について、前半で述べた。この授業において高校生らから受け取った感想文記述を抜粋検討し、授業の成果と課題について考察した。